

電動車椅子で生活する石田智哉監督は3年前、立教大学映像身体学科の卒業制作のために、障害者の表現活動について取材を始めた。耳の聞こえないパフォーマーの佐沢静枝、目が見えない俳優の美月めぐみに話を聞き、2人がハンディを越えて、全身で感じ、全身で表現していることを知る。

自分の身体を使う

さらに石田はダンサーの砂連尾理に出会う。障害を持つ「コンテクストが違う身体」と捉える砂連尾は、車椅子の人にもバレエダンサーにも同じように興味をもち、共に舞台を作る。石田は舞台への参加を誘われる。カフカの「変身」をモチーフにした舞台。石田は車椅子で走り回る。車椅子を

障害者監督のセルフドキュメンタリー



電動車椅子で生活する石田智哉監督の「へんしんっ！」

©2020 Tomoya Ishida

描かれるのは池田の愛の模索であり、生の模索だ。おしゃれで快活な池田はキックボードに乗り、夜の街に繰り出す。恋愛観を語る。真野が出演を依頼した女優を相手に理想のデート場面を設定し、撮影する。

がんを告知された池田は

もう一つの素顔

39歳目前で末期がんと診断された池田は「今までやれなかつたことをやりたい」と考え、女性と情を交わす姿を含め、自身を撮影。友人の脚本家・真野勝成に「僕が死んだら映画を完成させ、公開してほしい」と遺言し、2年後に他界した。

映画作り通し生き方模索

表現を模索し、生き方を模索する。身体が不自由な映画監督が撮ったセルフドキュメンタリーが相次ぎ公開された。真摯な生の模索は様々なバリアーを越えて見る者の心を揺さぶる。

は、石田の映画作りの模索の過程をそのままドキュメンタリーにした作品だ。

「一方的に指示する暴君にはなりたくない」という石田にとって、スタッフとのコミュニケーションも手探りだ。撮影、録音のスタッフと共に大学の保健室を訪ね、障害者と介助者の関係性を考える。さらに佐沢や美月と共に、障害者同士の伝達についても考える。

手話で意思を伝えるうつ者一人では「監督という立場を忘れて自分も入ってしまつた」。そんな自由な映画作りが、この作品を輝かせる。予測不能な生の模索がそこに映っているからだ。

「愛について語るときにイケダの語ること」(公開

中)は四肢軟骨無形形成症で身長112cmの市役所職員、池田英彦監督の遺作。



池田英彦監督「愛について語るときにイケダの語ること」の一場面

すぐに真野に連絡し、映画作りへの協力を頼んだ。「池田は自分のダークサイド、本当の姿を見せつけたかったのだと思う」と真野。デート場面の女優のセリフは真野が書いたが、池田の反応に筋書きはない。女性に愛を告白され、池田はしばらくじっと考えて、断る。そして「愛している」ということのわからなさを語る。明るい池田のもう一つの素顔が見えてくる。

「池田が自分の意志で自分できらけ出してできた映画」と真野。清く正しい障害者像ではない、生身の人間がそこに映っている。

東日本大震災からコロナ禍まで、自分と同じ聴覚障害者の災害体験を追う「きこえなかったあの日」(公開)を監督した今村彩子は近年、2本のセルフドキュメンタリーを撮った。自転車で日本縦断する「St art Line」(2016年)とアスペルガーラ症候群の友人との交遊を撮つた「友達やめた」(20年)。

「10年間で私も変わった。ユメントリーを撮った。自

接に結びついている。

撮ることと生きることが密接に結びついている。

(編集委員 古賀重樹)